

ハリソン・サグレ-ヴズ

東尋坊は遠くの昔に出来上がり、地中で沸騰していたマグマが外の空気に触れる寸前で留まり、完全に冷えたら今のままの東尋坊の基盤が初めて作られた。地殻変動で地中に隠れていたいくつかの石柱が地面の上に現れ、ようやく露わになった。東尋坊を形成する石柱の集まりは、実は輝石安山岩の柱状節理という世界に3ヶ所しか発見されていない珍しい地形である。東尋坊の地形は見ている位置によって形姿も違って見えることもあって、目撃情報によれば岩盤が鉢の巢の形状をして見えたり、ライオンの頭のように見えたりもするそうなのである。

丸岡城は江戸時代の丸岡藩に支配された城塞であり、安土桃山時代に建設されたとされている天守が日本に未だ建っている歴史に伝わる天守12個の一つであり、日本の重要文化財の一つとして指定されている。それだけではなく、北陸地方に存在する天守は丸岡市にあるの一つしかない。天守近くの井戸の表札を見れば、丸岡城は一つのあだ名を持っていて、城の近くで紛争が起きた時、巨大な蛇が井戸の底から這い出て、岡全土を霞に覆わせたことから霞ヶ城とも呼ばれている。福井県全地によく知られている柴田勝家の甥である柴田勝豊が1576年に初めて建城し、織田信長の家臣として丸岡付近の北陸地方を治めていたのである。昔は城の周りの石垣がよく崩れていたもので、「人柱」という風習が生まれ、行事の経緯をいうと人間を生きているままで土の中、または水の中等に沈めて埋めることで、城のものは災厄や戦火から守られるのだと伝えられている。柴田勝豊が丸岡城を治めていた当時、お静という名前の女の人は自分の息子を武士の身分へと引き上げるために人柱になる約束をしてはいたのであるが、勝豊が程なく移住したので、お静とその息子との約束が果たされなかった。この話は代々に引き継がれ、昔お静が大蛇として生まれ変わり、丸岡市で暴れまわったと言われている、今でも4月になると、丸岡市で雨がよく降

るようになったもので、4月に降りしきる雨はお静の涙雨と呼ばれている。